

第22号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十六年五月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

君だけを	小野村	新	6
ありなし	大西隆史		15
科学者の独り言	大西隆史		17
親愛なる村岡花子様	明花		20
「俳句 二句」	彩華		23
ちよつと寄り道	水田竜子		24
遣らずの雨	高阪博一		26
娘に思ふこと	魅華		43
「俳句」	夏子		47
お洒落	胃弱亭	骨人	48
フオーク川柳?	高阪博一		52
居酒屋	石川希理		54
仏教	笠	智衆	65
編集室から			71

∴『東はりま文化子午線』三十七号より転載

∴『文芸春秋』昭和二十六年十二月号より転載

君だけを

小野村 新

大学時代はノンポリだった。大学構内に
なだれ込んできた機動隊に石を投げつけた
りしたことはあつたものの、横一列にずらり
と並んだ機動隊の前を通る時には、隊列集
団の威圧感におびえ足が震えていた。社会
の矛盾から目をそらしていたわけではな
かつたし、政治的関心もそれ相応にはあつ
たけれど、積極的に学生運動に参加するこ
とは遂になかった。大学生をその生き方から
分類し定義づけるとしたら、私はアルバイ

ト学生という範疇に属した。かといって、年
がら年中アルバイトばかりしていたわけ
はない。学校にもきちんと通っていた。ただ、
他の学生に比べて、生活の中に占めるアルバ
イトの時間が著しく多かつたというだけのこ
とである。

高校生の時に父親を亡くしたので、母か
らのわずかな仕送りと奨学金を頼りにく
らしていた。アルバイトは、新聞の求人欄で
さがした。喫茶店のボーイ、ビアガーデンや
レストランのウェイター。日雇いで鉄工所に
勤めたこともあつたし、友人と土方に行つた
りもした。

一ヶ月間働いたのに、無収入に終わったアルバイトも体験した。そのアルバイトは、連日朝日新聞の求人欄に掲載されていた、高価な英英百科辞典と英会話のカセットテープを売るセールスの仕事であった。一つの契約が成立すると、二万八千円から三万二千円を与えるという望外の報酬に、私は楽しい皮算用をめぐらしたものであった。一月に一つの契約を取ると、母親からの仕送りは無用となる。二つ契約を取れば、…。電話をかけまくり、住宅街で飛び込みセールスを続け、一ヶ月ほど精魂傾けたが、契約は一件も成就しなかった。電話代、交

通費、キット(資料)代で一万二千円の損失をこうむる結果となつてしまったのであった。最も長期にわたつて続けたアルバイトは、地方の書店に送る新刊書を箱に詰める仕事であった。このアルバイトは、大学三年の夏から卒業するまで続けた。T出版販売の広いフロアに、本の小山が数多く築かれていた。その小山から大小の本を選別し、バランスよくダンボール箱に詰め込んでいく作業である。美術書や写真集などの大判サイズの豪華本から単行本、文庫本、コンパクト版の歌集など、さまざまな本を箱詰めする。詰め終わると箱の蓋を閉じ、上部に配送伝

票を貼り付ける。いかに要領よく短時間で詰め終わるかを、仲間と競つたりもした。自慢にもならないことであるが、本の箱詰めに関しては誰にも負けない自信が今でもある。T出版販売のアルバイトには、ユニークな人物が多かった。その中に、歌手を目指している片桐という男がいた。鹿児島の高校を中退して上京し、赤坂にある音楽事務所のオーディションを受け続けていた。彼は私よりも二歳年下であったが、T出版販売では少しだけ先輩であった。

彼はいわゆるフリーターであった。やせぎすな体型で、高校生のようなあどけない顔

立ちに、いつも微笑を浮かべていた。アパートの家賃を滞納して住むことができなくなり、友だちのところを転々としていた。時には、T出版販売で夜を明かすこともあった。顔なじみになった守衛が当番の日には、守衛室のソファで寝ることを許してくれたらしい。私のアパートにも時々泊まることがあったが、そのうち、居着くようになってしまった。

片桐は西郷輝彦の歌をよく歌った。『君だけを』や『十七歳のこの胸に』を大きな声で歌った。西郷輝彦は、片桐の中学校の先輩に当たるとしく、故郷の誇らしい先輩と

して尊敬していた。ビブラートを効かせて動作たつぷりに歌う彼の歌唱には、何かしら心を打つものがあつた。音程もしつかりしており、NHKのどじまんに出場したら、確実に鐘が連打されたであろう。西郷輝彦のよいうな歌手になるんだ、それが片桐の夢であつた。

最初の頃は、お互いにけつこう楽しくやつていたが、四畳半一間の同居に、私はしだいに息苦しさを感じはじめてきた。片桐の大きな歌声に、隣室から苦情が寄せられたこともあつた。片桐も敏感に私の不機嫌を察したようであり、気詰まりな雰囲気が部屋

にただよい始めていた。しかし、それでも片桐は私の鷹揚な性格に甘えて動じない、そういうた図太さをもつていた。

そうこうしているうちに、片桐との同居生活は、あえなく終わりを告げた。彼は、楠木と同棲相手と一緒に逐電してしまつたのであつた。

楠木というのは片桐の友人で、偶然にも私のアパートから五十メートルほどの所に住んでいた、国立大学に籍を置く学生運動の活動家であつた。T出版販売のアルバイト学生の中には学生運動の活動家が多く居

り、彼らに誘われて片桐も時々デモに参加していた。そのつながりで、片桐は楠木と知り合つたのであつた。片桐から聞いたところによると、楠木の実家は京都の有名な老舗旅館で、彼は親から多額の仕送りを受けており、二階建ての広い家を借りて、同じ大学の女子学生と同棲しているということだつた。また、楠木という姓は偽名であり、片桐も彼の本名を知らなかつた。

住居から近かつたこともあり、私は片桐に誘われて楠木を訪問したことがあつた。木枯らしが吹きすさぶ寒い冬の日であつたことを記憶している。彼の借家は、幹線道路

から少し奥まつたところにある二階建ての古い家屋であつた。片桐と私は、楠木と同棲相手である髪の高い細身の女性に導かれて二階の和室に通された。大きな座卓を前にして座つていた屈強そうな長髪の人物が居住まいを正し、「はじめまして」と私に挨拶し、にっこりとほほえんだ。その笑顔は、どことなくフオークシンガーの高石ともやに似ていた。今しがたまで、鉄筆でガリ版に文字を刻んでいたらしい。ガリ版原紙の文字が、蛍光灯の光を浴びて白く輝いて見えた。楠木が所属するセクトの機関紙を編集して発刊する役割を担つていることは、片桐から

聞いていた。おそらく、その作業に没頭していたのであろう。石油ストーブにかけられたやかんからしゅんしゅんと湯気が立ち、部屋はとても暖かかった。背後の壁に設置されたスチール製の本棚には、思想書や哲学書などの数多くの書籍が並んでいた。

楠木は同棲相手の女性を「妻の佳代さんです」と紹介した。彼は、非常に落ち着いた穏やかなものの言い方をした。佳代さんに対して、丁寧な敬語で話した。「隣の部屋からピラを持ってきてくれませんか」「二人にお茶をいれてあげてください」。そのような物言いであった。片桐から楠木のことは

聞いていたが、これほど沈着で紳士的な人物だとは意外であった。私よりも一つ下の二十歳らしかったが、まるでそうは見えなかった。年齢に似ず老成した風貌が、彼の一語一語に、説得力のある重々しさを加えていた。

佳代さんは、美しい人であった。俗世間の塵に染まらない清純さと、華やいだ明るさを併せ持っていた。黒いどつくりのセーターが豊満な胸をかたどり、青いジーンズの脚はすらりと伸びていた。佳代さんも、楠木に対して、「……ですか？」といったものの言い方をした。一時間ほどの滞在だったが、私は

相づちをうったり愛想笑いに終始し、ほとんど喋らなかつた。佳代さんも、一度も会話には加わらなかつた。楠木と片桐だけが喋つた。ふたりの会話の中で、今でも鮮明に覚えている部分がある。

「最近、警察がこの辺をうろつくようになってきましたね」「以前はいろいろな人がカンプパしてくれていたんですが、最近はめつきり減りました。いちばん頼りになるのがT・Rですね」

私はこのT・Rという評論家をテレビや雑誌などを通して知っていたので、このような有名な人物が彼らの会話の中に登場する

ことに驚いた。

帰途、楠木が爆弾製造に関わり始めていることを片桐から聞かされて、最近勃発した交番襲撃事件が思いだされた。借家付近を張り込んだりし始めたのもそのことを警察が察知したからか。確かに、学生運動や労働運動は過激化の一途をたどっているように思われた。片桐が佳代さんと失踪したことを知つたのは、楠木が突然私のアパートを尋ねてきたことによつてであつた。

「いつもいつも泊めてやったのに……。あの男は、思知らずのげす野郎ですよ！」

冷静な楠木が、興奮を隠しきれずに片

桐を罵倒した。楠木は、さまざまな所を捜し歩いた。佳代さんの宇都宮の実家にも行つたけれど、うちがあかなかつたらしい。もちろん、私にも片桐の在処など、わかるわけもなかつた。

あれから四十三年という歳月が流れた。片桐も、楠木も、佳代さんも、私と同じように六十歳を超えたはずだ。

佳代さんとは一度だけの、それも一時間だけの出会いだった。しかし、私にはあの一時間が大切な恋人との逢瀬のように、懐かしく思い出されるのである。一時間の間、私

は佳代さんの表情だけを見ていた。楠木に寄り添うようにして座っていた、幸せそうな表情だけを。片桐でなくとも、がむしやらに奪つて一緒に逃げたいと思わせるようなそんな魅力を備えた女であつた。

それにしても、片桐と佳代さんはあの時いつたいてどこに逃げたのだろうか？ 二人は今でも一緒にいるのだろうか？ そして、楠木とはいつたいて何者だつたのか？ 彼は、組織の中核に居た男だつたように思われる。彼が一連の連合赤軍事件や浅間山荘事件と関わっていたのではないかと、さまざまに調べてもみた。しかし、当時の名のある活動

家や検挙者の中に、彼らしき人物を見いだすことはできなかつた。

私は東京を離れ、四十年間教員として故郷の高校に勤め、今春退職した。三人の子どももそれぞれ独立し、妻と二人で暮らしている。月並みな凡々とした四十年の人生であつたと思う。そのような日々の生活の中で、時として“東京”が蘇り、片桐の大きな歌声が聞こえてくることがある。

いつでもいつでも君だけを

夢に見ている僕なんだ
星の光を映してる

君の瞳に出会った
胸がふるえる僕なんだ

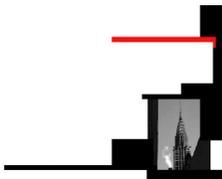
いつでもいつでも君だけが

待っていらそうな街の角

そんな気持ちにさせるのは

君のすてきな黒い髪

雨に濡れてた長い髪



ありなし

大西隆史

無神経な奴だつて怒るけど

神経を使うところがないんだから仕方ないだろうよ

無粋な奴だつて渋い顔するけど

粋なんてなろうとも思っていないのだから仕方ないだろうよ

無頓着な奴だつて呆れるけど

頓着するものなんてないんだから仕方ないだろうよ

無愛想な奴だつていらいらしてるけど

愛想を始終ふりまくのも大変なのだから仕方がないだろうよ

あつてもなくてもいいことなのに

なくちやだめだと大騒ぎ

あることを誇らず

ないことを嘆かず

そして最後は有耶無耶に

良いではないか

良いではないか

科学者の独り言

大西隆史

思っている

長生きはしたくないと

がんで死ぬのもまたいいかなと

生命科学なんていうもので食みながら

がんを治すために研究をしていますと言いながら

喘いでいる

生きる為に殺すその矛盾に

終着点の向こうが見えずとも進まねばならない事に

自分が生きていくためだと無理やり領きながら
頑張ればきつと報われると言われながら

たぶん選ばない

がんを治す薬ができて

悪くなった臓器をとつかえつこできて

そんなことが

死ぬ、ということがいまよりずっと難しくなったとしても

たぶん選ばない

生きたいと思う

逝きたいと思う

生かせてくれと思う

逝かせてくれと思う
身震いがした

今日も生命科学を掘り下げる
食むために
生きるために
逝くために



親愛なる村岡花子様

明花

NHKの朝ドラは、「じえじえじえ」の『あまちゃん』、渡辺謙の娘でモデルの杏主演の『ごちそうさん』が好評で、私も朝八時にはテレビの前で楽しみにしている。

そしてこの四月からは、新番組で村岡花子の半生を描くのだという。初めて番組の宣伝をみたとき、「えつ、村岡花子さん？」とテレビに問いかけた。もちろんテレビからの反応はないが、NHKもやるなあ、とつぶやいてしまった。

私が本を読み始めたのは、小学二年生の頃からで、耽るように読み始めたのは、小学五、六年の頃。中学生の頃には毎週土曜日の図書の貸出は常連で、誰も借りていない真つ新的図書カードに自分の名前を書くのが嬉しかった。

そんな中学二年の冬のある日、私は『赤毛のアン』と出会った。その当時、毎週土曜日は半ドンで、帰宅後昼食を食べ、すぐに自分の部屋で読み始めた。たぶん最初のページの数行で、

息をするのも忘れて本の中に入り込んで一気に読んだ。そして『赤毛のアン』からはじまるシリーズ十冊を読み切り、また『赤毛のアン』に戻りもう一巡、読み浸った。

アン・シャーリーは私の腹心の友で、理想の男性はギルバート・ブライス。世界地図を見ては、いつか必ずカナダのプリンスエドワード島に行くことを夢みるようになった。

ただ、その時は訳者の村岡花子さんではなく、作者のルーシー・モード・モンゴメリが大好きになった。因みにモンゴメリの没月日は、私の誕生日と同じなのだ。

私の本棚には高校生のときに買った新潮文庫の『赤毛のアン』シリーズが、まだ並んでいる。それはもうすでに経年劣化により茶色く変色しているし、老眼の目には昔の小さな活字で、たぶん読まないし、読めないように思っていた。

そんなある日、本屋でふと懐かしさも手伝って『赤毛のアン』を手にとった。

ところが、あれほど大好きだったアンなのに、体が文章を拒否してくる。頭にまったく入ってこないどころか、イライラしてくる始末。

何故なんだろう？ 修飾語がいっぱいの英文の訳を読むのが、めんどろになってしまったの

だろうか？ 手にとつたものの買う気にはなれず、書棚に戻すときに気がついたのだ。訳者が違ふということに。

初めて読んだのが村岡さんの訳だったから、私のアンは村岡アンだったのだ。それは卵からかえつたヒナが最初に見たものを親だと思つてついでに行く「インプリンティング」みたいなものだつたのだろう。自宅で茶色くなつたボロボロのアンを改めて読み返してみる。

違和感なく私のなかでアンが動き始める。英文和訳というよりは、村岡花子さんの日本語の文章が、私には心地良かった。

二〇〇八年には花子さんの孫娘が発刊した『アンのゆりかご』を読み、アンが生まれた背景を知ることになり、それ以来、村岡花子さんは私の中で絶対的な作者の一人となつただ。

以上のような理由で、親愛なる村岡花子様

この春からのテレビドラマを楽しみにしています。

腹心の友より

平成二十五年NHK全国俳句大会入選

彩さい

華はな

自由題

魚になりたい紫陽花の青い海

題詠「母」

鉦叩き亡き母そこにいるような

ちよつと寄り道

水田竜子

3年生きればいいですね

その日から主人は病氣と向き合いあらゆる本、手記を読み始めた
結果再発すれば7年で死を向えるケースが多いことを知る

娘の勧めで転院

完治を目指します

医師の言葉がなんと心強いことか

それから、3年過ぎ5年経った

主人はその間、ぽつんと「俺死ぬから…」何回か口にした

それが冗談のように聞こえ、「みんな死ぬから。そういう人に限って長生きするんだよ」と

応える

主人には見せない心の中

再発したらどうしよう

心の中に留まる思い

時が経ち、くよくよしても仕方がない　なるようになる

主人と楽しい時間を一緒に過ごそう　気持ちが変わる

ちようど同じ頃、主人よりもっと大変な人と出会う

「負けたな」笑いながらつぶやいた二人で

遣らずの雨

高阪博一

冬の雨は冷たく寂しい。春の雨は暖かく優しい。季節は確実に移っていく。露に濡れた梅が色褪せて、木蓮が濁りのない白い花を散らすと、そろそろ桜の薄紅が恋しくなる。川沿いの桜並木はこの小さな町では数少ない名所だ。樹齢百年ほどもするという古木をはじめとして、数百本が片側の堤に連なっている。弥生の頃には、淡い陽炎のよくな柔らかい陽の中を花見の人々が行き

交う。夜ともなれば、雪洞ボンボリの仄かな灯りと連なる夜店の沈むような灯りに、夜桜が密やかに息づいている。

カズユキ和之はこの町で生まれ育った。進学、就職でここを離れたが、三年前に帰って来た。六十歳で定年退職すると、無性にここへ帰りたくなった。あれから四十数年以上の歳月が流れている。その間、帰ったといえ、盆暮れの時期くらいだ。都会生活に慣れた身にとつて、ここでの暮らしをもう一度始められるか？といえ、不安はあつた。その気持ちとは裏腹に、この町の呼ぶ声が増しに

強くなつていった、理由は定かではなかつたものの。

幸い、亡き父母の残してくれた家や土地を売らずに生きていた。それに、結婚までの長い独身生活で、日常のことは粗方一人で出来るようになっていた。再び独り身に戻っていた和之にとっては、気兼ねする相手もいなかった。ただ、自分さえ決断すれば良いだけの事だつた。簡単な事だと思つた。

桜の最も美しいのはどの頃なのかと、いつか和之は思つた事がある。人に聞くと、まちなまちな答えが返ってくる。咲き始めの初々しい愛らしさを言う人がいる。満開の圧倒

的な陶醉を言う人がいる。散りゆく潔い寂寥を言う人もいる。人様々で、どれも当て嵌まつているように和之は思つたものだつた。

或る時、川面を薄紅に染め、静かに流れてゆく花びらたちを見た事があつた。時には澱み、時には二手に分かれ又出会い、何事もなかつたように去つてゆくその姿を、和之は美しいと思つた。誰かがそれを花筏と教えてくれた。綺麗な言葉だと思つた。今年も名残を惜しむように筏は流れ去つた。もう、夏の走りの若葉が茂り、爽やかで、心地良さそうな木陰を作る季節になつていた。この町に帰つて来た頃、親戚や幼馴染達

は、和之の一人暮らしを心配してくれた。

「奥さんと別れて、もう三年。そろそろ、後の事を考えても……。男一人では何かと不自由でしょ。いい人がいるから、紹介するよ。良かったら」と言ってくれる人もいた。だが、そんな気は和之に起こらなかった。

特に憎しみ合っていた訳ではない。小さな違和感が徐々に大きなミゾとなり、気付いた時には、越えられないほどのものが二人の間に横たわっていたのだ。飽き飽きするような惰性だけが積み、部屋中に充満しているような生活、乾涸びた沈黙が支配する重い時間だけの生活に和之は耐えられなかつ

た。

「どうする？これから」

「あなたは？」

「こんな生活は続けられないよ」

「わたしも、そう。この生活をやめれば、何か、変わるような気がするわ。子供がいなくてわたし達。自分だけの事を考えれば良いだけなもの」

「そうかも知れない。この六月で定年だから、それで終わりにしよう。それまで、互いに条件を話し合おうよ」

「いいわよ」

そんな会話を交わしたのが、桜の咲く頃

だった。簡単な会話だった、何十年と暮らしたというのに。二か月後には、お互い別々の道を歩み始めていた。別れるとなれば、男女の間などあつけないものだ。二人の間に確かに在ったものが、在ったはずに変わり、在りはしなかつたになつた。ただそれだけの事だと和之は思つた。

子供がいなかつた所為かも、と和之は考えてみた。あの深いミソはそれだけでは出来ない。子供の事は大きな要素の一つではあるけど、決定的な一つではないと和之は思つた。男と女が別れるには、いろいろな理由があるものだ。別れた後で、あれだ、これだと

理由を詮索しても仕方のない事だ。だが、ただ一つだけ和之が身に染みたのは、情性という事の怖さだった。気付いた時には、鎖が全身に絡みついて身動き出来ないようになっていた。もう、あの鎖はコリ、ゴリだと和之は思つた。

生まれ故郷で土をいじり、読書に明け暮れ、ノンビリと独りでいれば、この土地で暮らしていた以前の心に戻れるような気がしていた。もう、この頃では、誰にも邪魔をされず日常生活を送る事が、和之にとつてはこの上なく快適なものになっていた。散歩の時に会おう夫婦連れを見て、自分が結婚して

いた事に気付くような始末だった。

そば降る雨が窓を濡らしていた。和之は日課にしている散歩をどうしよかと迷った。

雨に濡れた桜の青葉を見たかったのだ。光を映す青葉も美しいが、濡れて光るのも美しいだろうと思つた。「あそこは、桜が多いからなあ。雨降りに、ちよつと物好きだけど：。時間なら売るほどある。やつぱり、行こう」和之は独り言を言いながら、表へ出た。「二十分もあれば、あの堤に行ける。これ位なら、足元も大丈夫だ」傘を差して歩き出した。

青葉に細かい露がついている。それが葉脈

にそつて大きくなり、音もなく流れ落ちる。

町の名所とはいえ、雨の日だ。それに、桜の頃をどうに過ぎていく。「ひよつとして、青葉を独り占め出来るかも」と和之は考えながら歩いていると、最も大きな桜の古木の下に人影を認めた。鮮やかなレモン・イエローのレインコートを着た女性だった。「物好きは、俺だけじゃなかった。独り占めも：。」和之は多少皮肉な微笑みを漏らしていた。

「何をしているのかなあ。人を待っている？こんな雨の中で。それはない。雨宿りに決まっている」いつもは通り過ぎてしまうのに、今日に限って、妙に和之は気になつて仕

方がなかった。声を掛けようとして、徐々に近づいて行つた。女性の顔がはつきりと見えた。何処かで会つた事があるような気がした。思い出せない。だが、会つたことがある、きつと。躊躇いを懐かしさが払拭した。唐突とは思いつつ、和之は話かけずにいられたなかつた。「雨宿りですか」和之は、決まっているだろう、もつと気の利いた言葉がなかつたのか、と心の中で思いながら、この女性の言葉を待つた。

「そうです。わたしつてバカですよ。レインコートを着たというのに、傘を持たないで、出てくるなんてね」

「五月にしては、今日はちよつと寒いからでしょ。それに、降り出したのは半時間ほど前。出がけの頃は降っていなかつたのかも」「おつしやる通りなのです。降っていませんでしたわ」

和之はこんな会話を交わしながら、恥ずかしがる事もなく、素直に話に乗ってくるこの女性をじつと見詰めて、傘を差しかけた。雨の降りようが思いなしか、弱くなつてきた。

薄い化粧の顔は張りを失う事なく、柔らかな弾力に満ちている。多少丸みを帯びた額、潤んだ瞳。すつと通つた鼻筋が口元も引

き締めている。どこか聡明で、それでいて刺々しさのない優しい感じを和之に与えた。「幾つだろう？ 三十代後半かなあ。ここで、この年代の人に知り合いはない。だけどやはり、会った事がある。ええつと」和之は記憶の衰えた自分を悔やみながら、思い出そうと頭を巡らせていた。

「この町にお住まいですか」

「いいえ。久しぶりに、帰って来ました。三年ぶりかしら」

「そうすると、ご両親が住んでいらつしやるのですね」

「いいえ。両親はもうおりません。家がある

だけです」

女性の瞳に翳りのようなものが浮かんだ気がした。それは決して悲しみを表すものではない。多少の後ろめたさのある時に抱く後悔の色のようにであった。

「申し訳ありません。わるい事をお聞きしたようですね」

「いいえ、そんな事はありません。もう、時間も経っていますので」

「あなたの幼い頃だったのですね」

「そうです。父は私が物心の付く前に亡くなりました。だから、殆ど記憶がないのです」とその女性が言った。和之は次の言葉を

促すべきかどうか迷った。ちよつとした沈黙の後、その女性がまた口を開いた。

「母が一人で育ててくれました、ずっと一人で。女一人では大変だつたと思います。苦労もあつたと思います」

「そうでしょね。お一人ではねえ」

「その母も、七年前に亡くなりました。呆気ないものでした。体調が悪いついて、病院に行き検査を受けました。結果はあと六か月の命だと……と何か遙かなものを見るようにその女性は淡々と続けるのだった。

「私は母の看病もろくに出来なかつたのです。結婚を機に、この町を離れていましたの

で。晩婚で子供も小さく、育児に追われてもいました。母は寂しかったでしょうね」

声のトーンが落ちたような気が和之には感じられた。母一人が部屋で寝ている。徐々に身体は変化していく。それに気付かぬはずはない。どんなに辛い気持ちであつたらうか、それは当然想像がつく。

「付き添いの看護師から聞きましたが、いつも化粧はしていたそうです。痛い、辛いとは、一言も言わなかつたそうです。だから、余計に、悔いが残ります」

和之はこれ以上、言わす必要がないと思つた。今日、会つたばかりなのだ。こんなプラ

イベートな話をさせて、思い出させる事はない。その女性が瞳を逸ソらせたので、何かほかの話をしようと和之は考えた。雨が細かな粒のようになってきた。

「そろそろ、雨が止みそうですね」

「ほんとうに。向こうの空が明るくなってきました。今年は雨がよくふりますね。足を止めて申し訳ありません、余計な話をして」
「いえ、わたしのほうこそ、声をかけたりして。もし良ければ、もう少し、お話、出来ませんか、雨が止んでしまうまで」と和之は言い、傘を差しかけた時から思っている事を口に出した。

「先程から、何処かで、以前、お会いしたような気がして、仕方がないのです」

「そうですか。どなたかと、似ているのでしょうか、わたしが」とその女性がはにかみながら呟いた。

「宜しいですか。時間はおありですか」

「わたしは構いません。叔母の家に、明日帰ると挨拶に行くだけですから。家は歩いて五分程度の所にありますので」とその女性は言いながら、和之の方をじつと見ている。
和之はそう言ったものの、何を話そうか迷っていた。会った事があるとか懐かしさを感ずるとかいつても、余りに漠然としている。

相手も言葉には出さないが、困惑しているはずだ。ここはもう一度元に戻って、傘を差しかけた時に戻ろう。そう考えると、まだ、お互い名乗っていないのに、和之は気付いた。「まだ、名乗ってなかったですね。私は佐田和之です」

「失礼しました。山本純子です。旧姓は浅見ですけども」

この町には浅見姓は多い。最も多いのは佐田姓で、その次くらいだろうか。それに、同性同士で結婚するのも珍しくはない。この町に帰って、もう三年になる。日常的に浅見姓は耳にしている。何とも思わなかったこ

の姓が、目の前にいるこの女性の口から聞くと、気になる響きで、耳に届いた。懐かしい顔が浮んできた、今まで封印していたその顔が。浅見美佐子、頭の奥に終い込んだ名前だ。

彼女とは高校時代に三年間、同クラスだった。入学時は特に意識する事もなかった。短くカットした髪、すらつとした痩身、どこかボーイッシュな感じを与え、女性を感じさせなかった。その年の秋も深まり、文化祭の練習で、クラスの皆が放課後集まる機会が多くなった。その時、決まって最後はフオ

ークダンスをしたものだった。必ずクラスにはマドンナがいる。その手を握ろうと男子は躍りだつた。

和之はいつも不思議に思つていた。ダンスが始まり、環が動いて、パートナーチェンジが繰り返される。次はマドンナだと思つた途端、曲が終わる事だった。その日もいろいろな曲を踊っているうちに、念願かなつて、やっと、マドンナの手を握る事が出来た。「何て、固いの。あーあ」と落胆の思いを抱いた時、次のパートナーに美佐子が回つて来た。握つた。今までにない感触だった。言葉が見つからなかつた。

和之は「マシヨマロ？ ふんわりした羽根布団？ 何かなあ。経験ないもの、言葉が見つからんのは当たり前」と心の中で呟きながら、美佐子をまじまじと見た。「意外に綺麗だ。それに、ふくよかだ。隠された未知の部分も、さぞかし」と健康な若い男の抱く妄想をかきたてた。その時、一瞬にして、和之は青い匂いのする恋に落ちてしまつていた。

それからというもの口実を設けては美佐子の傍に行くようになった。「この問題、教えてくれる？」「あのレコード、貸そうか？」「先生の言つていた本、読んだ？」何でも良かった、話が出来れば。美佐子も嫌がる風

もなく必ず応じてくれた。瞬く間に、もう二度目の桜が咲き、蟬が鳴いて、木々が紅く色づき、寒い北風が木の葉を舞散らしていった。

「どうするの、進学は」

「いくよ、京都に」

「わたしは家から通えるところ、あの美大」

「遠いなあ。離れ離れだなあ。逢えるのは休みだけ、寂しいなあ。おれも美大に！」

「ばか。何描^カいても、ピカソのあの顔でしょ。

見た通り、描けない人が。冗談はやめて」

ピシヤリと言った後、美佐子は落胆したように笑うだけだった。出来るなら同じ美

大に行きたいと和之は心から思った。何の準備もしていない自分が通るはずもなく、美術を続けられる自信もなかった。

和之も美佐子も、互いに合格した。京都に下宿を見つけ引越をしようとした前日に、和之は美佐子にあの桜並木で逢った。そろそろ散り始めた桜が雪洞の思わせぶりな淡い光を受けていた。夜店の人も、肌寒い日のせいかなかった。和之は美佐子の肩に手を掛けた。二年も経つというのに、あの手しか握った事がなかった。それ以上を望んでも、出来ない自分が苛立たしかった。和之はその日、互いに大人になるんだと強く

決心していた。抱いた美佐子の肩に、桜の花びらがはらはらと落ちていった。どこか無残で、それでいて、とても艶めかしいように和之は感じていた。

新しい生活は時間を忘れさせた。見るもの、聞くものが新鮮で刺激に充ち溢れていた。それでも、下宿の寢床に入り天井を眺めては、あの日の美佐子の姿態を思い出していた。外見とは裏腹な、ふくよかで柔らかな四肢が、何か別の動物のように蠢くのを。早く逢いたいと思つた。心の中で若さという怪物が動き回っていた。周りの事など見ようとしない、ただ一途な怪物が。夏休

みまで、まだ一ヶ月以上はあつた。

堤の桜並木は絶好の木陰を作っていた。容赦なく射す陽が遮られ、そこだけが別の世界のようにだつた。暑さを一層強く感じさせる蝉の声も、そこにいる限り気にならなかつた。美佐子はスケッチ旅行にグループで行き、その後制作があるとかで、逢えたのは和之が帰省して、半月ほども経っていた。和之は夏がこんなに暑く、苦しいものだと思つて初めて知つた。

逢つていれば、慕^{オモ}いの変化は感じるものだ。あの数か月前とは違う空気を和之は感じていた。二人の間にある見えない距離のよ

うなものを。美佐子の手を握った。あの夜と違ふ何か装うような、ひんやりとした手。和之は木陰から漏れる光を眩しそうに遮り、俯く美佐子の言葉を待っていた、不安な思いに駆られながら。「あの時、身体だけではなく、心も一つになつていたはずだ」と和之は焦る気持ちを打ち消そうと懸命に心の中で呟いていた。こんな長い沈黙は経験した事がないと思っていた。

「先輩で、好きな…」と口籠つて美佐子は言った。妙に鮮やかな黄色のシャツのボタンを弄ぶように、触りながら。そんな美佐子を見て、和之は全てを察した。余りにも

「呆気ない幕切れだった。言い募る事は出来たかもしれない。俺たちの仲はそんな簡単なもの?」「俺のどこが?」「どんな人?」和之はそんな言葉を飲み込み、黙つて美佐子の傍を離れた。

「何か、グラスに付いた泡みたいだ。上にいくと、弾けてしまうような」和之は誰に言うともなく、小さな声を出していた。女は分らない。謎だと思つた。もし、詫びて来れば、それでも赦そうと思つた。ヒグラスが鳴いても、何の便りもありはしなかった。初めての経験。青い、本当に、青い経験だった。

和之はどれ程の時間が流れたのか分からなかった。この沈黙は長かつたのだろうか、それとも、一瞬であつたのだろうか。雨はもう止んでいた。向こうの雲間からは、一条の光が射しているのが見えた。傘をすぼめて、純子と名乗る相手を見た。何かを待つてゐるように、その女性も和之を見ていた。

「突然、黙つてしまつてすみません。もう少し話をしましうつて、言つておいて」

「いいえ、別に気になさらないで下さい。誰でも、突然、何かふと考える事があるものですよ。人と話していても、何か別の事を」

「申し訳ありません。あなたが旧姓を浅見

とおつしやつたので、昔、知り合ひだつたひとが頭に浮かんできたのです。長い間、思い出す事のなかつたひとなのですが」

「どんな方でしょう。あら、失礼な事を言つてしまいましたね。そろそろ、叔母の家に行かないと……。叔母が用事に出ていくかもしれません」

「そうですね。それじゃ、またの機会に」

和之はそう言つて、一呼吸おいた。気を取り直したように、その女性にもう一度声をかけた。どうしても知りたい一つだけの事を聞くために。

「ところで、お母様は何というお名前なので

すか」

「母ですか。母は陽子、浅見陽子です」

「そうですね」

落胆の色が混じっていたのだろう。その女性
性は訝しそうに和之を見て、次の言葉を待
っている。

「お母様を知っているような気になっていま
した。でも、違いました。知っているのは、浅
見美佐子という方です」

「浅見つて、この町では、多いですものね。有
難うございました。では……」

レモン・イエローのコートが、雨上がりの鮮
やかな緑の中に吸い込まれるように小さく

なつていく。和之は静かに去つて行く後ろ姿
を眺めながら、木の傍らにじつと立っていた。

「美佐子はどうしているだろうか？」自然
とその言葉が口から溢れ出た。この町に帰つ
て来て、三年。封印していた名前を口に出
したのだ。生きているのか、それとも亡くなつ
ているのか。独りでいるのか、それとも二人で
いるのか。いろいろ知りたい事が頭を過ぎヨぎつ
た。「帰つて来た時に、すぐ探せば良いもの
を。知り合いもいる。聞こうとはしなかつた
が、ちよつとは風の便りがあつたはずなのに」
多少の自戒を込めながら、和之は呟いた。
「いや、待てよ。このままで、良かったのか

も」と和之は打ち消すように、短い独り言を言つて、吹き出した風に揺らぐ緑の木葉を見つめた。「見つけ出すと、美佐子は俺と同じ歳になつてしまう。肌も弛み、張りのないカサカサした姿になつてしまう。今、思い浮かぶのは、あの時の美佐子なのだ。決して、歳は取らない、十八歳の弾むような姿のまま、俺の頭の中で固まっているのだ。昔の写真は色褪せても、写っている人は撮られた時の状態のまま、変わらないように」と和之は心の中で思った。逃げていった相手を未だに思い出してしまふ不甲斐ない自嘲の笑いとともに。

雨に洗われた木の葉が静かにそよいでいる。これから、蝉が鳴き、木の葉が色づき、冷たい風が枯葉を払うと、蕾が膨らみ、見事な花を咲かす。堤の桜はこの命の循環を、あの年もこの年も繰り返している。和之はじつと、手の甲を眺めた。血管が青く浮き、数えきれない皺がそれを覆っている。この頃、歩く速度も遅くなつていくように感じている。「それじゃあ、並木の端まで行くか」と吹き、一つ息を吸つて、「歩くしかないもの、行きつくまでは……」和之はそつと桜の木を見上げた。

了

娘に思うこと

魅華

ひなまつりが過ぎた頃から再び寒くなつた。春は足踏みしているものの、日は長くなり、天気の良い日には日差しに少しのぬくもりを感じられるようになった。

確実に春に近づいている。そう思うと心がウキウキしてくる。薄紅色の桜の花を思い浮かべたり、重いコートを脱いで公園を散策する自分を想像しながら町を歩いていると、アクセサリーのお店にであつた。中に入って好みのものを鏡に映しながらつけてみる。淡いパープルにしようか、好きな淡いピンク色にしようか、それとも白に：迷つたあげくどの服にも合いそうな物にした。

次にイヤリングもつけてみた。今まで持っていない雰囲気のものを買った。店を出ると自然に笑顔になり、私には一足早い春が訪れたのである。

そうすると服も欲しくなった。通りがかりの服屋さんには、春らしくパステルカラーのブラウスやアンサンブル、そしてワンピースがかけてあり目を引いた。どれにしようかなど、手に取ろうとしたがやめた。やっぱり娘と一緒に来て選ばうと店を出た。

と言うのも前に長女が、私の着ている服を見て「何でそんなの買うかなあ、私が選んであげるよ」と言ってくれたことがあった。それからと言うもの娘がコーディネートになった。若いだけに私が選ばないような服を探してくれる。試着するとたいいてい気に入って買う。

思いついた時にとまって、「また服見に行こうよ」とメールした。

私には二人の娘がいる。長女はコーディネートター兼、聞いて欲しいことがあれば電話する。とよく話を聞いてくれ、なるほどと思うことを返してくれる友達のような関係。

次女はお料理が得意なので新しいメニューを提供してくれる、料理アドバイザー兼たまの部屋の整理整頓係で助かっている。おかげで、マンネリ化していた我が家の食卓は以前に比べると、バラエティにとぶようになった。この頃はメニューを考えるのも楽しい。

この前も、孫のりおんの好きな物を作ると、「おいしい！おいしい！また作ってえ」とせがまれた。

娘が来て話をしたり、一緒にお買い物をするのと気持ちが若返る。年をとることに娘がい、お嫁さんは気を使うしと世間で言われることがよく分かるようになった。二人とも結婚して親になり、独身の頃とは主人や私に対する気持ちも変わっているし、私たちもまた気持ちが和らいでいる。

一人身の時は勉強や、仕事に追われゆくり話をする時間もなく、また若いゆえに私にも覚えがあるが、親の言うことを聞こうとしない面もあった。それが腹立たしく不愉快な思いをすることも多々あったので、離れて暮らす今の方が気持ちが良い合えて楽しい。

殊に主人が5年前に大病した時には、力になつてくれてとても有難かった。明石市民病院で、投薬治療を続けても3年生きられるかどうかと宣告され、長女が毎日インターネットで他の病院を必死で探してくれた。そして、京都大学付属病院にたどりついた。投薬と、放

射線の治療の併用で完治を目指す治療が受けられることを話し、娘の説得に主人はうなづいた。

あれから5年経った今、おかげさまで再発することなく主人は生かされている。できるだけみんな笑って楽しい時を過ごしたい。そして一日も長くいい時が続きますように祈っている。



愛してもいいですか芒揺れたから

夏子

『東はりま文化子午線』37号

●作品は、毎年十月末くらい締めきりで募集があります。随筆(エッセイ)は原稿用紙3枚くらいのもので。アクトスHPトップに見本へのリンクがあります。

◆東はりま文化子午線の作品提出方法。

〒673-1415 加東市下久米1227-18

県立嬉野台生涯教育センター内 東播磨文化団体連合会

文芸誌『東はりま文化子午線』発行委員会 宛

◆問い合わせ

0795(44)0711

ジャンル・枚数などは電話で尋ねてください。

お洒落^{しゃれ}

胃弱亭 骨人

若い頃からお洒落のようでありました。

仕事仲間の美術教師からも度々お洒落だと言われてきましたので、多少はそのセンスは持ち合わせていたのでしょう。ただ、私自身を置いた教育界は、子供達の幸せを願う余り、己のファッションなど顧みることもなく、お洒落への関心もすこぶる低い方々が集まる特殊な世界であります。そんな中で独り自分の好みに拘^{こだわ}って、ややもすれば現場にふさわしからぬ私のファッションが仲間

の目にはどことなくお洒落に映っていただけのことです。教師のファッションなるものが横行する中での私のお洒落などはたかが知れたものであります。

記憶にない私の父は、若い頃「やつし」であつたと、母や叔父からよく聞かされておりました。この「やつし」という言葉はお洒落を意味するのですが、男の私には何故か不遜な響きをもち、どうも好きにはなれませんでした。お洒落感覚が血であるとするならば、私のお洒落はきつと父親譲りであると言えるでしょうが、今となっては父のお洒落がどのようなものであつたか知る由

もありません。

世の中にはお洒落などする必要も全くない風貌、風体に恵まれて、何を着てもどんな格好をしても様になるようなイケメンも沢山おられますが、私のように眉毛も乏しく、陰険な目つきで、やせ細った猫背の力マキリのような風体の男は、己の個性を生かすお洒落でしか救われないのであります。幸い生まれ育った環境のせいもあつて、私は何事にも好き嫌いがはつきりした性格で、自分の好きなものへの偏りと拘りが非常に強く、ファッションに関しても若い頃から好きな色やデザインに執着し続けて参りました。

た。この年になつても、陰険な顔は眼鏡と口髭でごまかし、自分好みのファッションで身を包むことで何とか心の安定を得ているような人間であります。

中学生の頃、母が買つてくれた紅殻色べんがらのシャツが大へん気に入り、毎日のように鏡に写しては独り悦に入つておりました。思えばこれが私のファッションへの拘りの第一歩であつたと思われます。自分の冷たく淋しい風貌を補う赤味を帯びた暖色を好むのも美的本能の一つと言えるでしょう。逆に青味の強い寒色は私には絶対に似合わないという信念のもと、今までほとんど青系統の

色の服は着たことはありません。青い開襟シャツを着て町へ出るといふ拷問に私は耐えることができないのであります。

私は在職中陸上部に携つておりましたが顧問という立場から試合の時には水色の審判服を着用することになっておりました。

それは陸上競技に携わる者のステータスでもあつたのですが、私はどうしてもその水色の服を着ることが出来ず、自分独りえんじのシャツを着ながら最後まで抵抗し続けました。

青系統の色は一般的に日本人好みの無難な色で昔からよく制服やユニホームに用

いられる色なのですが、それだけに個性的ではないと思うのです。要するにひねくれ者の私は周りと同じ格好をするのが嫌いなので、あらゆる場面において、いかにも○○○らしいと感じるような格好だけはしたくないのであります。

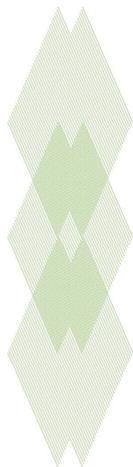
反面、自分の好きな色やデザインへの拘りは大へん強く、自分の好きな衣服やカバンなどは修理をしても愛用し続けております。若い頃はイタリヤ旅行中に見つけたレンガ色のジャケットは風合も気に入つて、襟や袖が擦り切れるまで着つづけて、役目を終えた今はタンスの奥に眠っております。

又、その時一緒に買った革のカバンは一度の修理を経て今も健在であります。

自分の気に入ったものは、ちよつと無理してでも手に入れて、そればかり愛用し続けて飽きることはないのです。「己の好みに拘こたわり、常に個性的でありたい。」これが私の偏かたよった「お洒落」であります。

春だと言うのにまだ居候を続ける冬。この季節もあと何回くらい味わうことが出来るのだろうかなどと考えると、この厳しい寒ささえも何だかとおしく感じられます。ちよつぴりお洒落なじいさんは、今日もお

気に入りの厚手のツイードのジャケットに紺地に赤のマフラーなびかせて薄紅色の自転車にまたがり京の町を駆け巡っております。



◆ ショートショート

フオーク川柳？

高阪博一

ときめいてターンをしたら目が回り

柔らかな手にときめいてフリ忘れ

ドキドキと胸の高鳴り不整脈

ことぶき大学のフオークダンス部に入って、もう三年目となる。何故入部したのか、未だに分らない。その当時飲んでいた薬のせいだったのか（決して、怪しいものではありません、念のため）。ええいままよ！式の勢いだったのか。美しいひと？を見つけたためだったのか。

今となつては、動機を考えても仕方がない。二年間ダンスを続け、三年目もやるつもりになっている。何か良いところがあるに違いない。さて…、あ、思い付いた。

「高ちゃん、そこは左ターン！」「高ちゃん、そつちの手は右手！」「高ちゃん、リズム感、ないなあ！」と叱咤の嵐なのだが、目は笑っている。その時のお姉さん方は優しく、チャーミングで、元氣浚刺としている。そうだ、この元氣を貰っているのだ。つまり、わたしの滋養強壯剤という事なのだ。了

広告

短編小説集

【コシーナ文庫】

エスプラネード



石川希理 著

梅花女子大学非常勤講師

◆2013年（平成25年）

12月1日・第1刷・発行

アマゾンからご注文いただけます。

定価645円（+税） **送料無料。**

「エスプラネード」

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点になったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード（遊歩道）で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は（ま、しゃあないか）と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家

「神戸新聞書評・二〇一三年三月三十日」

居酒屋

石川希理

土井信蔵は、イズオンをでた。

営繕課長だが、雑用係に近い。課長の下に係長が二名いて、それぞれの係の下に三名ずつの係員がいる。別に営繕スタッフという非常勤職員が二十四名もいて、この監督も営繕課の仕事である。

イズオンは大久保駅南の総合スーパーである。一部十二階建てのビルが四棟もある。中には食料品から専門店街まで雑居している。レストラン街、マルチスクリーン映画

館、ボーリング場、スポーツジム、フィットネスクラブ、歯科、眼科、内科、耳鼻咽喉科、泌尿器科に薬局、認定こども園まで揃っている。一つの小さな街と言ってもいい。

駅周辺にはマンション群があり、そのまわりの丘陵地に戸建ての新興住宅街が広がっている。

営繕課は「修理課」である。よほど専門的な資格や技術の必要なこと以外の作業なら何でもする。

課長だからといって座っているわけにはいかない。手が足りないときには、ハンマーやドライバー片手に現場に出ることもある。だ

からモスグリーンの作業着姿である。ネクタイを締めていることで、「ははあ、事務員さんか」とわかる。改めて名札を見て、「あ、課長なのか」と気がつく仕掛けになっている。

イズオンは、娯楽施設を除いて午後十時までの営業だが、営繕課長はたいいてい七時頃には退社できる。あとは係長二名が交代で勤務する。

駅前から自宅まではバスで十五分だが、駅北は、銀行や会社、商店、ビジネスホテルが林立し飲み屋も多い。独りで夕食を済ませて帰ることにしている。早く帰ってもレトルトの夕食を個食するだけだ。

「忘れないでね」

妻の三角の目が浮かぶ。突き放したようなランプブラック色の声だ。大学時代からのつきあいである。四角い大きな顔が愛おしくて結婚したのだが、二十年が経つてみると、あまり見たくはない。

(ま、京子もそうだろうな)

土井信蔵は自分の顔を思い浮かべてみる。小顔で男前だ。仲村トオルみたいで、結構もてたものだが、今は少々下ぶくれた。渋いと言えないこともないが、五十歳にもなると、シミ皺もあつて、相当くたびれている。暗くなり出した大久保駅北の歩き慣れ

た飲み屋街を進む。五分程で、「サンズ」に着く。多分、今日も島田さんがいるだろう。駅南のマンションに住む七十五歳の独り者だという。いつのころからか話すようになった。

頼まれた買い物は忘れずに紙袋に入っている。長男の高校三年、信一郎の電子辞書だ。イズオンの学用品売り場で社員が購入すると二割引だ。ネット通販より安い。それでも四万八千円もする。現代国語・日本語漢字・英和・和英類語・英会話・トレンド辞書・地図と何でも入っていて、音声検索までできる。もう受験の年明けまで三ヶ月ほど

だというのに、いまごろ必要だと言いだした。
(京蔵もそうか……)

次男は中三で高校受験だ。イズオンの給料は手取りで月四十三万。自宅のローンが十二万ほどもあるから、あまり楽な暮らしではない。

妻の京子は専業主婦で、時折「アルバイトにいこうかしら」というが、本気ではないのはアツシユグレイ色の声でわかる。軽くて、信蔵の稼ぎを揶揄しているような響きだ。

大きなため息を吐いたら、歩道のミニトグリーンの化粧煉瓦の表面に、灰色の塊がおちた気がした。

「サンズ」は無愛想な店だ。「らっしやい」

「いらっしやい」「まいど」と、ドアを開けると教室程の空間に元気な声が飛び交う。ただし、コンクリートの土間に、パイプ椅子と、安物の化粧板の机が八つほど並んでいるだけだ。壁にはお品書きがベタベタ貼つてあつて、突き当たりが厨房でその境に、酒のあてが皿に盛られて並んでいる。飯屋スタイルだ。造りなどは注文すればでてくるが、これがまたでかい。

安くて美味くて量が多い。だからいつもサラリーマンで満席である。

「やあ」

土井信蔵は片手をあげて壁隅の席にいた島田さんの前に紙袋を置くと、突き当たりの総菜棚から、ぶりの照り焼きと、卵焼きをとつてきて腰を降ろした。素早く横に来た店員の「お飲み物」という言葉に被せるように「生中」という。

島田さんは黙つてワケギのぬたを口に運んでいる。飲み物はいつもたつぶり二合入る白い徳利である。

信蔵は黙つたまま運ばれてきた生中を少し口に含むとゴクリと喉を鳴らした。四十歳の時に胃潰瘍で胃の部分切除をしている。もうなんともないが、できるだけ暴飲

暴食には気をつけるようにしている。五十歳で死にたくはない。ストレスのせいでこのごろは右耳が難聴気味だが、島田さんと話していると気分が楽になる。

「涼しなつたなあ」

島田さんは、しらが頭を上に向けて少しどんよりした目という。もう徳利の半分以上は空いているらしい。いつも六時半ごろ来て一、二時間ほどはいる。

「十月ですわねえ」

一応、敬語を使う。二十五歳上だから、故郷にいるおやじより五つほど若いだけだ。容貌は、おやじに似ていないこともない。

信蔵は、めつきりと弱つて、頭がつるりと禿げて小さくなったおやじを思い浮かべた。青森県五所川原市で三つ下のおふくろと、国民年金頼りに古い家に住み続けている。もう三年ほど会っていない。正月と盆に電話をかけるくらいだ。五所川原までは遠い。

信蔵の妹夫婦は、彼の住む関西より遙か南の熊本暮らしだ。子どももない上に嫁ぎ先の両親の世話もあるから、留守にはできない。

二人も子どもがいて、どちらも顔を見せないのは、両親にすれば淋しいだろうと思う。だが、年に一度くらいは訪ねないといけ

ないと頭の隅で考えるだけで毎日の生活に埋没している。子どもたちも受験期だし、それぞれ落ち着けば一度訪ねようとぼんやりと意識はしている。もつとも妻の京子はあまり会いたくないようで、それを考えると気が重い。

最近では四人に一人が高齢者だということから老人が溢れている。長老とか、古老といった尊称はなくなつた。年寄なんていう言葉も相撲などでは生き残っているが、一般にはあまり良い意味にはとられない。田んぼや畑、漁や狩りといった生活は少なくなり、技術も経験も役立たない。

人が五十歳前後でなくなつた、ある意味古き良き時代は、戦後半世紀で姿を消した。

といって老人が溢れているのは病院の待合室、スポーツジム、介護施設、パチンコ屋、早朝の散歩道だけだ。日中はもちろん盛り場でも見かけない。みんな自宅でテレビのお守りをしているのだ。

島田さんのようなのは珍しいかも知れない。奥さんを五年前に亡くし、子どもは五百キロの彼方にいる。引き取られるのは難しく、島田さんも住み慣れた大久保を動く気はない。身体が不自由になれば、老健施

設か、特養にでも入るつもりだ。四十数年、サラリーマンをしてきても一千万以上もする、そして月々十数万の費用がかかる老人マンションに入るほどの蓄えはない。年金は月に十四万ほどだが、自宅マンションにいればなんとか食べていける。

「相棒は面白いですか」

信蔵は前に聞いた島田さんの話を思い出した。NHKの大河ドラマと朝の連ドラと、ためしてがってん、相棒と、たけしの健康番組は録画してでも必ず見るのだそうだ。野球や相撲もテレビはつけっぱなしにしているらしい。

あまりクローズアップ現代とかNHKスペシャルとか、旅番組、昼のニュースバラエティ、池上彰の報道番組などはでてこない。もう興味がないのだろう。

そういえば友だちの話とか、何か趣味の会とか、老人大学などの話もない。ぽつりと漏らしたことがあるが、七十五歳くらいで中小企業に勤めていて、子どもも大して出世もせず、特技のない人間には、高齢者が群れて自分や息子や孫のことを話す「自慢講」はしんどいのだ。自分が惨めにもなるが、年老いて過去の栄光だけ自慢している中にいると、哀れにもなる。また七十五歳で

は八十歳以上が多くいる中では若者扱いされて、それもうんざりする。高齢者が多すぎて、一歳でも年上か歳下かで目の色が変わるのだ。

「相棒は面白いよ」

島田さんは唇の端を歪めた。小顔の猿のような皺がニタリとした。

結末が意表を突くのが面白いらしい。確かに脚本がよくできていて、ドラマの半分が過ぎるまでは犯人の予想がつかないことが多い。

「あんな部長もいるしなあ」

「あ、そうですね。いますねえ実際に。口には

出さないけれどああいう手合い」

片桐竜次という役者さんだ。刑事部長で水谷豊を「特命係」に追いやった人物という設定らしい。権威的で責任回避、態度横柄、上には弱いという典型的憎まれ役だ。

「国家権力まで出てくるからな。ときどき話のスケールがでかくなるのもいい」

「本当にそうですね、ニュースで事件が起きると、水谷豊に推理してもらえと思うことがあります」

「あんな係で一生過ごせたらいいだろうな」
「ですね」

卵焼きが喉をすするりと通り過ぎた。

いつもこんな話だ。時には信蔵の愚痴も聞いてもらうが、あまり生臭くはならないようにしている。

(おやじの代わりかな…)

信蔵はそんな気もする。

おふくろにも会いたい、自分が五十歳になって、おやじの人生の痛みを感じる事ができる。

三十分ほど話していたら、島田さんの徳利が空になった。

「さてと、少し早い、じゃあ」

島田さんが腰を上げる。信蔵も腕時計を見て、残ったビールを飲み干した。島田さ

んの出て行くのを片目で見ながら腰を上げた。今から駅北のバス停に向かうと八時過ぎには帰宅できる。風呂に入って寝るだけだ。

一千二百円の支払いをして「サンズ」をでると闇が地上まで屈み込んでいた。ネオンが浮き上がって明滅している。

フラフラと歩き出した。色々な店ができたものだ。イズオンが完成した二十年前は半分近くが田んぼであったのだ。もう土も空も、影も形もなくて、アスファルトとコンクリートに覆われている。ペンシルビルが建ち並び、雑然とした建物が空を削り取ってい

る。暗い横道を覗くと、見たこともない店が

突然現れていたりして、驚くこともある。

「なおい」「レピユード」「妙」「明子」「伝」

「白木屋」「膳屋」「倉」「のみや」「熊五郎」

「釈」「ともえ」「蔵」「はたごや」「巴屋」「エ

ス」「天地」「若松」「星」……、看板自体

がそれぞれが思いを込めて光っている。

「ん」

少しとろりとした目で、路地を覗くと、

男の姿が見えた。

背中がヒヤリとした。

頭の禿げた小柄な男性が、小さな女性

を伴って、路地にある店に入ろうとしてい

る。

男が、信蔵を見て、白い歯を見せた。

心臓がどきんと大きく打った。頭の芯が

痺れた。

（おやじ……）

慌てて立ち止まり目を閉じて頭を振つ

た。青森の五所川原にいるおやじであるわ

けはない。目を開けると、男と女はビルの店

中に吸い込まれるところであつた。

今度は灰色の薄いコートを着た女性の後

ろ姿がおふくろとだぶつた。

信蔵は大きく息をついた。

呼気が大気の中にもやとなつて拡散し

た。

(会いに行かねばなあ……)

信蔵は歩き出した。

京子がどういおうと、年明けには一度訪ねようと思った。年末年始はイズオンは戦場になる。

十月の夜風が背広の中に忍び込んでくる。

不夜城のような駅ビルの手前に近づくと、携帯が鳴った。

イズオンでのトラブルかも知れない。嫌な気分が耳に当てると、京子のランプブラック色の声が飛び込んできた。

「あなた……」

信蔵は携帯をしまうと、バス停を通り越し、タクシー乗り場にかけてした。

五所川原の親が亡くなったという言葉だけが心を満たしていた。



仏教

笠りゅう
智衆ちしゅう

(俳優)

私は坊主の家に生れて、小さい時から兄と一緒に毎日勤行をさせられた。もし、それを怠けると、父から棒で、非道い打擲を受けた。それで自分は厭々乍ら仏の前に坐つて、解らないお経を読んだが、兄は、時々勤行をすつぽかして、父から非道い目に会つていた。それが段々と小学校から中学校になるに随つて、兄は暴れん坊の碌でなしになり、自分は温和しい良い坊ちゃんだと持てはやされて、

やがては寺の跡継は弟の自分だと決められていた。お盆などに、父の代理で檀家へお経を上げにゆく途中、兄が友達と悪戯遊びをして、いるのを見て、どの位羨しく思つたことか、内心は兄以上に、坊主が厭で厭でたまらないのに、父母、親戚、それから檀家までに、温和しい良い坊っちゃんだ、良い坊っちゃんだと祭り上げられている自分が、ひどく悲しかつた。兄はそれを良いことにして、中学を出ると、ふいと台湾へ出奔してしまつた。あとに残つた自分こそ、全く災難である。親戚、檀家総代、父等に連れられて、京都の本家である本願寺に、高い金を使つて跡目相続をやり

にいったときは、もう自分の一生は坊主だと思つて、ほんとに心の中は情けなかつた。

そして中学を出ると、早速、京都の坊主大
学に入らせられた。郷里の熊本では、常に看
視されていたが、遠く離れた京都では、そん
な、看視する人がいないので、段々と、自分
の坊主嫌いの本性が、頭をもたげ始めた。そ
うした動機が現在の商売に入った結果になつ
てしまつた。

三十年後のいま考えて、坊主を嫌つて、酒
と喧嘩と碌でなしと言われて出奔した兄が、
父の跡を継いで寺の住職におさまり、温和し
い良い坊つちやんだと言われた自分が、坊主

から、凡そ縁の遠い映画俳優になるなんて、
全く世の中なんて不思議なものである。

あれほど坊主を嫌つた自分であるけれど、
この頃、どうも寺に足が向くのもまた不思議
である。勿論散歩がてらではあるが、自分の
家から二三十分でゆける北鎌倉の寺々を廻る
のが、何んとなく気持が良い。仏の前に来る
と、自然とおじぎが出る。さては坊主に戻つ
たかなと、内心ぎよつとするが、頭を下げた
い心は、本心だから、どうも仕方がない。それ
では小さい時、坊主を嫌つた原因は何んだと
言われると、父の、鞭への反感が一番原因ら
しい。それに解らないむずかしいお経、陰気

臭い、爺さん婆さんしか集まらない寺なども、あつたらしい。

自分はいつも仏教に対して、こう思っている。何故キリスト教のように、若い人達が集って、歌を唱い、直ぐ解る平易な言葉で話合わないのか……教会は、明るく綺麗で、その上清潔である。寺が目慢している埃が少しもない。墓場を見ても大変美しい。それに死んだ人の名前が良く分る。仏教の墓場は、戒名という解らないむずかしい字で書かれてあるので、どれが誰れの墓か、全く分らない。戒名を覚えなければ、墓詣りにいけないなんて、全く不便なものである。尊い一生を過し

た立派な名前を、何故、墓標に印させないのであろうか、ことに、信士とか居士とか言う階級をつけるに至っては、最も不都合である。

そういう所に、仏教の時代錯誤というか、一つの矛盾がある。早く親鸞・日蓮のような名僧が出て、時代に順応した、誰れにでもよく解る、明るく楽しい仏教に改革しなければ、やがては他の宗教に浸蝕されて、亡ぼされてしまふに違いない。

つまり、キリスト教でも仏教でも、この外世界のあらゆる宗教でも、人間に教える窮極の目的は、大概同じであろうと思う。このようなと、宣伝の上手なのが一番世界に蔓はびこるこ

とになる。その点、キリスト教が一番上手である。

〔昭和二十六年十二月号〕

※文藝春秋の平成二十五年一月号は創刊九十周年記念である。

大正十一年末に菊池寛が発刊した創刊号は、本文二十八ページの薄い小冊子だったと、編集だよりにある。



現在は発行部数六十三万部と、総合雑誌ではずば抜けている。

これの最初の随筆欄に、九

十周年記念「巻頭随筆傑作選」があり、その最初がこの笠智衆りゅうちしゅうさんの「仏教」である。

山田洋次監督、主演、渥美清さんの「男はつらいよ」シリーズ。「寅さん」で有名。四十八作も撮られた。国民的な大人気を博したが、この映画の中で、お寺のご住職役で出演されていた。独特の口調で、昔は大根役者と言われたらしい。

よく覚えていないが日露戦争の時の二〇八高地争奪戦で正攻法を貫き、多数の死者を出した乃木希典大将も演じている。彼の大將は長男次男を戦争で失い、自らは明治天皇の崩御の後、妻とともに自死している。この演技が高く賞賛されている。私は寅さんの和尚さん役しか知らないが、个性的な名優であろう。

この方の随筆であるが、昭和二十六年のものである。私は四歳。まだ当然に高度成長は始まっておらず、第二次大戦の敗戦でもの凄く貧しい時代である。多分日本は再び甦ることがないと言われていた時であろう。これから朝鮮戦争を経て、高度成長が始まり、檀家制度は崩れていくのだが、実はもうこの時代に、ずばりとお寺の問題点が書かれている。なるほど日本の大乘仏教は滅びかかっているのだ。

尚、本文は、雑誌からOCRで取り込み整形した。
「石川希理」

■受贈誌の紹介

●ご惠贈ありがとうございました。

東はりま文化 子午線 第三十七号

「兵庫県東播磨文化団体連合会」

港の灯 第六号 「神戸市」

ペンペン草 第十二号 「兵庫県那珂ペンクラブ」

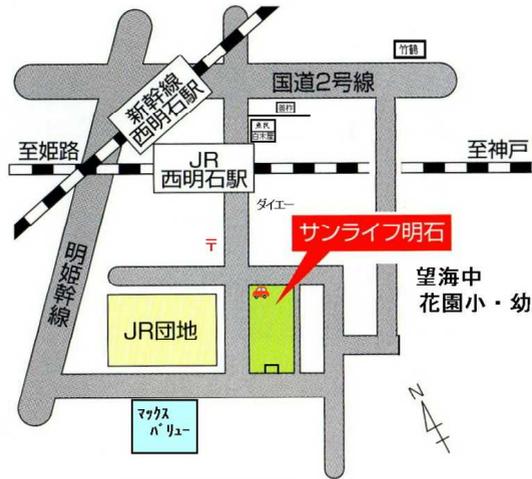
淡路島文学 第九号 「洲本市」

飢餓祭 第三十八号 「神戸市」

あへの文学 第十八号 「大阪市」

八月の群れ 第五十八号 「明石市」

●アクトス会員の皆さまには、閲覧希望がありましたら編集室までご連絡下さい。



◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

大西玄一郎

◆次号(第23号)の原稿締切は6月末必着です。

3月例会で23号に次の要領で競作しようと決まりました。

◎タイトル

息子 または 娘

※このタイトルでお書き下さい。

◎枚数

・小説10枚・エッセイ5枚

・詩3枚

・俳句とか短歌は15句・首

※400字詰め原稿用紙

換算です。公募と違い、厳密ではありません。それぞれ前後という意味です。

◎内容

大きくタイトルに関係しておれば可とします。想像の翼を広げて下さい。

◆5月例会は17(土)です。

第3土曜です。13時半から2時間半程度です。

例会後、参加可能の方は懇親会において下さい。

◆HPに、22号までを、PDFファイルで掲載しました。URLは次のとおりです。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>

(ネット検索の窓から「文芸アクトス」といれて探されても出てきます。)

◆通信にも記載しましたが、読書会員の森川紅様から20号のお祝いを頂きました。深謝いたします。会の運営費に使用したいと思えます。

■26年度に入りました。

移動・異動の時期で、今回は作品提出をバスという方もおられます。ただ十枚から二十枚前後の短いものですが小説が三篇掲載されています。是非ご感想をいただければ幸いです。

■ 入会下さい。ネットで参加可能です。

◆ 入会するには◆

- ① 会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ② 〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆ 会費等振込先(郵便・当座)◆

口座：00900-5-39616 大西 生一朗

アクトス 第22号

第6巻第2号・通巻第26号

発行 平成二十六年五月一日

編集 大西玄一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円